

やさしさ・ふれあい

9月は「同和問題啓発強調月間」です。

～部落差別のない社会の実現へ～

「関係ない」と思っていないですか？

「もう同和問題はなくなったのではないか」「自分には関係ない」と思っていないですか？ 出身地を理由に、結婚において反対することや、採用選考で不利益な扱いをする差別は、重大な人権侵害であり、同和問題に対する誤った考え方はいまだに残っています。

部落差別（同和問題）は、日本社会の歴史的過程で作られた身分制度に起因する日本固有の人権問題であり、今なお偏見や差別が完全に解消されたわけではありません。私たち一人ひとりが偏見や古

い慣習にとらわれず、「差別を絶対に許さない・解消していく」という意識を持つことが大切です。

9月は、滋賀県が提唱する「同和問題啓発強調月間」です。この機会に、身近な人権問題として同和問題について一緒に考えてみましょう。



次のような誤った考え方があります

もう同和問題はなくなったのでは…



同和地区の問合せや差別発言などが発生しているほか、インターネット上では、部落差別を助長するような内容の書き込みがみられます。

令和6年において、法務省が新規に救済手続きを開始したインターネット上の人権侵害情報に関する人権侵犯事件1,707件のうち、475件が識別情報の摘示でした。

また、これまで見てきたように同和地区との関わりを避けようとする意識や同和問題に対する誤った考え方もいまだに残っています。

このような状況を踏まえ、平成28年(2016年)には、部落差別解消推進法が施行されその第1条には、現在もなお部落差別が存在することが明記されています。

私たち一人ひとりが同和問題に対する理解を深め、差別のない社会の実現に向けて取り組むことが求められています。

差別は自然になくなるので、そっとしておいたほうがよいのでは…



「同和問題のことなど口に出さず、そっとしておけば、差別は自然になくなる」というのは、差別を受けている人たちに我慢を強いるものであって、結果的に差別を温存させる誤った考え方です。また、インターネット上のあやふやな情報やうわさ話により、さらに差別意識が広がってしまうこともあります。差別をなくすには、人権意識を高め、正しい知識を学ぶことが大切です。

同和地区の人が分散して住めば解決するのは…



「同和地区の人たちが、固まって住んでいるから差別されるのであって、分散して住めば、同和問題は解決する」というのは、部落差別は差別される側に問題があるという誤った考え方です。すでに地区外に出ている地区出身者やその家族でも、身元調査により差別されるという現実もあります。どこに住んでも、だれもが安心して幸せに過ごせる社会をつくることが大切です。

出典：『こころのいすみへ』（改訂版）令和8年(2026年)3月 滋賀県人権施策推進課 発行

「物差し」を捨てるとき

茨城県 茨城県立並木中等教育学校 3年

井上 祐太郎（いのうえ ゆうたろう）さん

Aさんは私の幼馴染だ。Aさんは生まれつき足が不自由で、車いすを使っている。そんなAさんと遊びの帰りに話していたときのことだ。私は、何気なく「毎日、大変だよな」と口にした。その瞬間、Aさんの笑顔がほんの少し曇ったように見えた。彼女は「まあ、慣れているから」と笑ったけれど、その返事は私の胸の奥に小さなひっかかりを残した。

家に帰ってから、その場面が頭から離れなかった。「大変だよな」という言葉は、励ましのつもりだった。しかし、もしかしたら私は、彼女の生活を「大変」と決めつけ、同情するような立場から見ているのではないか。Aさんにとっては、車いすは日常であり、当たり前の一部だ。それを「大変」と言われ続けることは、自分の生き方を特別視されることにつながるのではないか――そう思い始めた。

Aさんとは、中学に入ってから一緒に遊んでいる。Aさんはいつも明るく、周りを笑わせる存在だった。スポーツや手芸など様々なことを楽しんでいて、「努力していてすごい」と私は何度も思った。けれど今振り返ると、その「すごい」という評価も、私の中の物差しから出た言葉だったのかもしれない。

次の日、私はインターネットで「無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）」について調べてみた。それは、人が気づかないうちに抱いてしまう偏ったものの見方や考え方のことだと書かれていた。

「女性だから家事が得意」「高齢者は体が弱い」「障がいがある人は何もかも不便」というように、根拠のない思い込みが、知らないうちに人を傷つけることがあるらしい。ある調査では、日本人の約6割が「無意識の偏見を見聞きしたことがある」と答えているという。私は画面の文字を見つめながら、自分の言葉がまさにそれだったのだと気づき顔が熱くなった。

改めて思い返すと、私の周りにも偏見の例は少なくなかった。例えば、小学校の頃、クラスに外国から来たばかりの転校生がいた。日本語がたどたどしいという理由だけで、「勉強ができない」と決めつけられていた。実際には、彼は数学が得意で、私よりもずっと速く計算を解いていた。また、ある男子は「男のくせに泣くな」と先生に叱られていた。泣くことは自然な感情の表れなのに、性別を理由に制限されてしまっていた。今思えば、これらも無意識の偏見だったのだ。数日後、Aさんと再び話す機会があった。私は思い切って、「この前の言葉、もし嫌だったらごめん」と伝えた。するとAさんは「正直、あんまり言われたくないかな。でも気づいてくれてありがとう」と笑った。その笑顔を見て、私は胸のつかえが少し取れた気がした。

この出来事をきっかけに、私は普段の会話でも「相手がどう受け止めるか」を意識するようになった。自分では優しさのつもりでも、それが相手にとっては重く感じることもある。だからこそ、相手の立場を尊重し、知ることが大切だと学んだ。ニュースや本の中にも、似たような事例は多く紹介されている。ある視覚障がいのある男性は、駅で「大丈夫ですか？」と何度も声をかけられ、「親切心はありがたいが、過剰な手助けは自立の妨げになることもある」と話していた。これを読んだとき、私は自分の行動を重ねて考えずにはいられなかった。

人権とは、誰もが自分らしく生きる権利だ。それは特別な人だけにあるものではなく、すべての人に平等に与えられている。だから、相手を「特別な存在」として扱うことも、時に壁を作る原因になる。相手の立場や状況を想像しながら、必要なときに必要なサポートをする―それが本当の意味で人を尊重することだと感じる。私はこれからも、自分の中に潜んでいるかもしれない「無意識の偏見」に気づき、手放していきたい。そして、誰かの当たり前を、私の物差しで測らないようにしたい。もしこの意識を一人ひとりが持てたなら、社会はもっと温かく、安心できる場所になるだろう。学校も、職場も、街も、誰もが安心して過ごせる空間に近づくはずだ。

夕日の下で交わした小さな会話は、私に大きな学びをくれた。それは単なる友達とのやりとりではなく、「人を尊重する」という生き方を考えるきっかけだった。そして、この経験を胸に、これから出会うすべての人と向き合っていきたい。

